

エッセイ「カナレットと景観画」

瀬川紀雄

東京の新宿にある SOMPO 美術館で【カナレットとヴェネツィアの輝き】展が開催されており、風景画ファンとして行かなくてはとずっと思ってきた。これまでオランダ風景画展やバルビゾン派展を始め風景画を主とした各国あるいは海外のどこかの美術館の展覧会の他に、フェルメールを含めプッサン、ロラン、ロベール、コロ、ミレー、ターナーなどの各個展を訪れたが、憧れの実景画家カナレットである。油彩画の展示はわずか十三点にすぎないが、それだけでも十分に訪れる甲斐がある。

アメリカの〈ハドソン・リバー派〉展やスイスの山岳画展などの未訪を未だに後悔している。昨今の未訪では、同じく SOMPO 美術館および宮城県美術館で開催された二〇二一年の〈風景画の始まり コローから印象派へ〉展があった。

しかし高速夜行バスに乗るのに自身がなくなってきた。トイレのない日中の高速バスもそうである。倅が新幹線を勧めてくれ交通費の大部を援助してくれたため決断できた。

鑑賞したのは二〇二四年十二月二十八日、当館での最終日であった。まず入場券購入の列に並び、それは二度折れた三重の列だったが、チケ

ットを手にしてから今度は会場入り口の受付へ二列に折れた列の端に並ぶという、時間のかかるものだった。カナレットの人気、および絵画ファンの多さに驚いた次第である。

当展覧会は毎日新聞社とエディンバラのスコットランド国立美術館が共に実現する四度目の重要な企画制作という(アン・ライデン館長ごあいさつの文中)。二〇二四年七月に静岡県立美術館開催で始まり、SOMPO の次は京都、山口県(二〇二五年六月まで)となっている。約百八十頁の図録は三美術館と発行元でもある毎日新聞社による。以下の記述はほぼ当図録による。また写真は一部撮影可能であったが、作品前に鑑賞者が多くマナー上思うように撮れないのが正直なところだった。展覧会のエッセイを書きたくも、結局は以下のように、小生の癖でもあるが、図録の要点書きに終わってしまった。要点というのは、無知であった個人的な新しき知識や全体を把握するために常に頭に入れておきたい基本的事項が中心となっている。新たなことを知るにより作品の鑑賞力を深めることができ、それが何にもまして喜びである。素人ファンが独断的な陳述を付け足すことは過ちを犯しやすい。自らへのその防備でもある。本文そのままからのピックアップが真なる感想、というのが持論でもある。

今回はしかし、撮らせていただいた若干の写真と、撮影可の作品が多かったこともあり撮影不可も含むが図録の画をも記述に利用させていただくことにする。実は当日、カナレット展の前に、東京駅近くの三菱一

号館美術館で再開館記念としての【「不在」——トウールーズ・ロートレックとソフィ・カル】展を見学しており、そこでまず一部写真撮影可能であることに驚いた。現今ではそうなっているのかと歓喜したのである。エッセイに用いるのもかなり自由に思われる。

風景画に関する著作を幾らか読み、まずは最初の風景画家ともいえるべき十四世紀半ばに活躍したアンブロジー・ロレンツェッティに関するエッセイを同人誌で発表したのが、その後は各時代の風景画家について断片的にだけであり進捗していない。それだけにカナレットについて書いて、ちよつと安堵している。

まず図録の目次を掲げ、その後に各項目について個人的な記述をしていく。とは言っても前述の通りほとんど図録からピックアップした文章であり、自らのわずかしかない感想は紺色で表している。

なお、目次の項目と本文の項目を相互リンク（青色）している。

【目次】から

カナレットとヴェネツィアの輝き（クリストファー・ベイカー）

美術史の中のグランド・ツアー

——カナレットからモネへ（千足伸行）

カナレットの生涯（新田建史）

1. カナレット以前のヴェネツィア

Column 1 ヴェドゥータの成立前史

——都市景観とヴェネツィア派の絵画

2. カナレットのヴェドゥータ

Column 2 カナレットとパトロンたち

3. カナレットの版画と素描 —— 創造の周辺

Column 3 カナレット時代のカメラ・オブスキュラ

4. 同時代の画家たち、後継者たち

——カナレットに連なる系譜の展開

Column 4 都市の復興とヴェドゥータ

5. カナレットの遺産

Column 5 ヴェネツィア共和国の終焉

——ナポレオンの侵攻と都市改造

Appendix 水の都のガラスの軌跡（根本耕太郎）

カナレットとカメラ・オブスキュラの映像について（新田建史）

資料…ザネッティによる「カナレット伝」

作家解説、関連年表、関連地図、参考文献、作品リスト

【カナレットとヴェネツィアの輝き】

（クリストファー・ベイカー（エディンバラ大学教授）から抄

「アドリア海と空の間に奇跡的に浮かんでいる」ヴェネツィアは、

「ゴシック、ルネサンス、バロック建築の驚くべき総覧のごとき様相を呈している。そして運河を行き交う船は人々を魅了してやまない」「こうした特有の光景をカナレットは細部まで正確に、そして共感を込めて、巧みに記録した」

ヴェドゥータ(景観画)の伝統として、早くにヴェネツィアでカルパッチョ(活動期間1490-1523)が物語絵の美しい背景として描いていた。しかし都市景観としてのアプローチはイタリアからインスピレーションを受けたヴァンヴィテッリ(1652/3-1736、オランダ名：ガスパール・ファン・ウィッテル)ら北ヨーロッパの画家たちによって先鞭が付着けられ、カルレヴァリス(1683-1730)らが十八世紀初頭にこの野心を新たなレベルに押し上げた。これらの画家たちが開拓していたヴェドゥータの市場をカナレットは十分に活用することができた。

カナレットは一六九七年にヴェネツィアに生まれる。舞台背景画家であった父ベルナルド・カナル(1674-1744)と区別するため「カナレット(小さなカナル)」と呼ばれた。ヴェネツィアとローマの劇場で父とともに仕事をする。一七二〇年にヴェネツィアの画家組合に初めて登録され、晴れて景観画家として独り立ちする。特に英国のグラント・ツーリストから人気を得る。ベッドフォード公爵から連作の注文(24点)、あるいは外交官で大コレクターのジョゼフ・スミスのコレクションが国王ジョージ3世に売却され保存されることになったことなど。一七四〇年にオーストリア継承戦争が勃発し、外国人旅行者が減少し

たため、カナレットは「カプリッチョ」のジャンルも描き、パドヴァやローマに旅行している。そして、四六年に渡英。二度にわたりロンドンに長期滞在することとなる。渡英しているヴェネツィアの先人画家にアミゴーニ(1682-1752)、ペツレグリーニ(1675-1741)、セバステイアーノ・リッチ(1659-1734)らがいたが彼らは人物画を専門としていた。一七五六年にヴェネツィアに帰国。六三年にヴェネツィアの美術アカデミーの会員に迎えられ、功績が認められた。

カナレットの画風は三期に特徴づけられる。最初期は温かみのある色調と明るく澄んだ空の情景を特徴とし、中期は明確な輪郭線で画面を明るく太陽の光が満ちた作風、後年はより銀色味を帯びた色調で素早いタッチの点描と曲線によって人物像のハイライトなどの細部を描写する「カリグラフィ的」手法が用いられた。

同時代の画家として、カナレットの甥で優秀な弟子ベロツト(1722-1780)、独特のやや暗い色調を發展させ、後にドレスデンやワルシャワに滞在し、それらの街を描いた。生き生きとした作風のマリエスキ(1710-1743)とグアルデイ(1712-1793)もいて、後者は優美でロココ風な魅力的な表現に富む。

その後のカナレットの影響としては敬意と反抗心があるものの、ターナーやホイットスラー、モネへとつながる。

カナレットは、経験と観察に基づいた紛れもなく啓蒙思想の芸術家であった。

【美術史の中のグラランド・ツアー カナレットからモネへ】

(千足伸行(広島県立美術館長) から抄)

プロト(前)グラランド・ツアーとして、デューラー、ブリュッゲル、随筆家のモンテーニュ、そしてフランクフルト生まれの女性画家メーリアン(1647-1717)を挙げている。「五〇歳を過ぎてから単身、オランダ領の南米スリナム(旧称ギアナ)に旅し、ここの珍しい花や蝶、昆虫などを正確かつ芸術性豊かに再現した」という。

ネーデルラントから来たヴェドゥータの画家カルレヴァリスがカナレットに影響を与えた。15・16世紀のベルリーニ一族やカルパッチョなどは建築や景観を脇役の背景として描き、むしろ17世紀のオランダ絵画、例えばフェルメールの「デルフト風景」などヴェドゥータと呼んでも問題ない作品もある。この種の都市風景を得意としたハイデン(1637-1712)、サーンレダム(1597-1665)、デ・ウィッテ(1616-1691/2)、ベルクハイデ(1638-1698)などがいて、オランダの場合は(タウン(シテイ)スケープ)と呼ばれるが、ヴェドゥータとの境目は必ずしも明確でない。

グラランド・ツアー時代にローマで活躍したヴェドゥータの画家にパニーニ(1691-1765)がいる。「ローマのカナレット」的な位置を占めていた。ウィキペディアによると、ローマでカナレットを知り、彼の影響を受けたとされる。なお、パニーニの「古代ローマの諸情景」(ルーブル美術館、パリ)とウィキペディアで紹介されている「Picture gallery

with views of ancient Rome (1758)」と、よく見ると部分的に異なっているが。

ローマでもグラランド・ツアーは盛んであったが、18世紀後半のローマに新古典主義絵画の「宣言」ともいうべき「ホラティウス兄弟の誓い」(1784/5)を完成したダヴィド、新古典主義を先導したヴィンケルマン、代表的な画家メンクス、スイス出身の女性画家アンゲリカ・カウフマンなどが結集し新しい波にコスモポリタンの様相を呈していた。

世紀末にはロマン主義的な萌芽もあり、グラランド・ツアーのライバル的な「ピクチャレスクな旅」あるいは「ロマンティックな旅」が台頭してくる。以前ではサルヴァトル・ローザやクロード・ロランなどが描いた理想的あるいは古典的・英雄的風景を自然の中に求める旅を指す。「自然ありき」ではなく「タブロー(名画)ありき」の旅である。この概念は主に風景画に適用され、ターナー、モネ、ルノワール、ホイットラー、サージェントなど(近代のヴェネツィア派)ともいうべきものを形成している。

【カナレットの生涯】(新田健史) から抄

一七一九年、ナポリ出身の音楽家スカルラッティのオペラの舞台デザイナーのため、ベルナルドと共にローマに赴く。この地でカナレットは、景観画家の先達ガスパール・ヴァンヴィテッリの作品を見て、本人にも会ったと言われている」

第1章 カナレット以前のヴェネツィア

ヤーコポ・デ・バルバリ(1460/70-1516 以前)「ヴェネツィア鳥観図」。
一五〇〇年当時を描く。

17世紀後半にオランダからローマにやって来たヴァンヴィテッリがヴェドゥータ発展の祖となった。そして名声を確立したのがパニーニであった。

この頃、一方で時代を代表する世紀最大の画家はティエポロ(1696-1770)である。ティエポロがヴェネツィアの新興貴族たちの邸館の壁を華麗なフレスコ画で彩った。人々は黄金時代の巨匠ヴェロネーゼの祝祭的絵画を求めた。

図録から 画像

※ティエポロ 「ヴィーナスによって天上に導かれる」

ヴェットーレ・ピサーニ提督」1743年頃

「澄んだ青空に浮かぶ黄金色の雲の間を神々が軽やかに浮遊する天上の光景が、下から仰ぎ見るように逆光や短縮法の効果を駆使して描かれ、観る者を幻想的空間へといざなうかのようである」



(10点のエッチング連作)が陳列されている。人体の線が優しさに溢れ、顔の表情も温かみを覚え、実にいい、いや上手い！カナレットの版画集と比較すると、軽やかさや自由さが際立っているという。

図録から 画像

※ パニーニ (1691-1765) 「ローマ、ポルタ・サント・スピリト」



Column 1 【ヴェドゥータ成立前史】

都市景観とヴェネツィア派の絵画】

水の都ヴェネツィアは、四百以上の橋で結ばれた百十八の小さな島から構成された類まれな水上都市。

パオロ・ヴェネツィアーノ (1300頃-1365頃)

ビザンティン絵画の影響が色濃いゴシック様式。

(ネットから。ヴェネツィア出身の14世紀の画家、絵画の「ヴェネツィア派の創始者」。ヴェネツィア共和国の公式画家。彼は精巧に額縁されたポリテュクまたは「複合祭壇画」形式のヴェネツィアでの発展を主導した。これは13世紀中にイタリア全土で普及。名前が知られている最古のヴェネツィアの画家。彼のスタイルは「まだビザンチン」、つまりイタロビザンチン。)

ヴェネツィアーノ後、15世紀前半にフィレンツェの先進的ルネサンス様式を消化吸収し、ベツリーニ一族が活躍する。

息子ジェンティーレ・ベツリーニ (1429頃-1507) の「サン・マルコ広場での聖十字架の聖遺物の行列」(1496) とカルパッチョ (1460/65-1525/6) の「聖マルコのライオン」(1516)。ベツリーニのサン・マルコ広場作品で、背景ながらもサン・マルコ寺院などが半ば主題かのように立ち並ぶ建築物の詳細な描写に驚く。三・五メートルに七・七メートル

ルという大きさのテンペラ画である。

16世紀にヴェネツィア派という黄金時代を迎える。ベッリーニ工房に学んだ大好きなジョルジョーネ(1477-1510)とティツィアーノ(1488/90-1576)、世紀後半にティントレット(1519-94)とヴェロネーゼ(1528-88)らである。彼らはサン・マルコ地区の景観をしばしば取り入れた。その後、ヨーゼフ・ハインツ・イル・ジョーヴァネ(1600頃-8)の「レデントーレの祭の行列」(1648)がある。

第2章 カナレットのヴェドゥータ

カナレットがヴェドゥータを描き始めたのは一七一九年頃。当初は光と陰の効果、スポットライトの効果、表面を筆で丹念に触れていくタッチ、ごく淡く靄が漂っているような雰囲気を漂わせ、初期の作品はゲアルデイに近かったとされる。やがて、一七三〇年代までに、暖かった空は冷たく透き、水の波紋も定型的な表現となり、建物には定規を用い堅固さが強調される。四〇年代に空は再び暖かくなる。晩年は人物の表現の細部が省略され、光の粒が画面の中で踊っているような印象を与える。

〔出品No. 作品名 制作年 (油彩が13点展示)〕

17 「カナル・グランデ…パラッツォ・バルビから北東にリアルト橋を

望む」1724年頃

逆S字型のカナル・グランデ(大運河)の一部。オベリスクが2本突き出た左側の建物がパラッツォ・バルビ(宮殿)。運河の奥にあるリアルト橋周辺はヴェネツィア商業の中心地である。なお、政治の中心地はパラッツォ・ドゥカーレ(元首公邸)やサン・マルコ広場周辺。

宮殿の入口(裏口?)が階段状の船着き場にもなっていることにちよつとびっくり。いいなあ、と羨ましくもあり、ロマンも感じ。そして、細部が詳細なのだがやや朦朧とした雰囲気画面全体に古代ローマの都市を感じ。日が低いのだろう右側の建物の並び定まったような運河の表面と、青がのぞく空に定まらない妖しき雲の表現に新規さを感じる。

18 「サン・マルコ湾…北を望む」1730年頃

サン・マルコ湾を挟んでジュデツカ島から対岸の眺め。ドゥカーレ(元首公邸)、牢獄、サン・マルコ小広場、ゼツカ(造幣局)、サン・マルコ大聖堂の鐘楼など。手前左に丸い球の載ったドガーナ(税関)も。ゴンドラなど舟と働く人々、波止場に散策する高貴な服装の男女(剣をぶら下げた男は案内か、扇子を持つ女性の衣服は引きづるほどに)、漆景風ながら商談か男二人、野良犬だろうか一匹が目立つ。湾に反映しているのは建物と妖しい雲だろうか。普段着の広場を感じ。



19 「サン・ヴィオ広場から見たカナル・グランデ」 1730年以降

写真を撮れた！ 空が明るく水面も青さを増す。爽やかだ。建物の描写も光が豊かなためか実に精密で華麗である。

カナル・グランデに入ってまもなく少し遡るとアカデミア橋の手前にサン・ヴィオ広場（画面右下の箇所）。隣接するパラッツォ・バルバリゴ、その奥にサンタ・マリア・デッラ・サルUTE聖堂。遠く税関も見える。左に並ぶ建物はガイドブックで知られたものばかりという。

この眺めは人気があり、カナレットも気に入っていたようで類似した構図を何点も描いているという。舟の人々も気になるが、日常的な場景と思われる広場で杖を持ち犬を抱いた男、端に腰掛け指さしている男、特に壁に向かっておしっこしているのだろう男がすこぶる気になる。風俗画をも秘めた素晴らしい作品である。

20 「カナル・グランデのレガッタ」 1730-1739年頃

ヴェネツィアの祭の中で一際エキサイティングなレガッタ。船の種類や漕ぎ手の人数別に幾クラスかがあり、女性だけのクラスもあった。左端に浮き台でできた表彰場所が描かれている。そこには天辺に植木が乗った木や小さな人口の噴水も。左の宮殿には、カナレットのパトロである英国人が住んでいた。8人漕ぎの華やかな2艘の船の白と青の衣服は、名門ピサーニ家の色。船の彫刻的な人体や金箔の飾りが素晴らしい。小さなゴンドラ風な五艘が競争しているのだろうか。観光客を



乗せた船々もそれぞれ個性があつて楽しい。手前の幾艘かの人々の楽しそうな会話が伝わってくる。そして、建物の中から観戦している多くの人たちも考慮すると、何というスケール感！レガッタ故にか波立つだろう波の細かな表現が目につく。この表現はのちのちまで規範的になっているようだ。

レガッタの絵は、先人カルレヴァリスや、グアルデイも描いている。

21 「サン・マルコ広場」 1732-33年頃

「広場」をイタリア語で「ピアッツア」というが、ヴェネツィアの言葉で「カンポ」という。しかしただ一か所のサン・マルコ広場だけに「ピアッツア」を用いた。この絵で、左端にサン・マルコ大聖堂、その奥にドウカール（元首公邸）、さらに対岸にサン・ジョルジョ・マッジョーレ聖堂の円屋根が見える。サン・マルコ小広場に図書館、画面中央に大きく鐘楼、そのすぐ後ろに横長に続く新市庁舎、その右側に白いサン・ジェミニニャーノ聖堂が描かれている。

この画も実際の視覚ではありえない画角を取り、建物の集合を図っている。それが何の不思議さもなく扱われている。

サン・マルコ大聖堂の壁面のデザインや彫刻、および突き出た独立的な幾つもの彫刻（何による像か）が詳細で見事である。その大聖堂前の広場に種々の人々が描かれている。一人、二人から四五人のグループ、そして離れて人の集団、湾の船まで詳細に描かれ、画面全体は静的であ

るが、拡大して見ると日常の生が見えイタリア語は分からないが生きた声が聞こえてくる。丸い布張りのようなテントのようなものの下で何かを売っているのだろうか。必需品それとも土産品か。

22 「モロー河岸、聖テオドルスの柱を右に西を望む」 1738年頃

海からの旅人の玄関口となる、政治の中心地ドウカール（元首公邸）付近。画面右側に、サン・マルコ小広場にある2柱のひとつ「聖テオドルスの柱」、その後には図書館、さらに造幣局、穀物庫。対岸の方にサンタ・マリア・デツラ・サルテ聖堂と税関。大きく帆を掲げた2隻の船の先にレデントーレ聖堂の円蓋が見える。

これもドローンを用いた視点であり、望遠レンズで眺めた映像をクローズアップして組み合わせたものである。

波止場の橋は三段の階段状であり、そこに腰変えている人、船上で働いている人々、波止場にいる様々な衣服の人々で活気が伝わってくる。空の青と白い雲のグラデーション、聖堂の光、運河の色などによる画面全体の明るさも素敵である。

ただ、この絵を見たと思っっているが、リストに載っていない。

23 「昇天祭、モロー河岸に戻るプチントーロ」 1738-1742年頃

飾った船々のなか、元首の豪華な御座船が海に漕ぎ出る。旗を高々と上げ櫂まで金箔である。アドリア海に出ると、「海よ、汝と結婚する」

と唱えながら金の指輪を海に投げ入れる。華やかなキリスト昇天祭の歓声が聞こえてくる。宗教曲ではない世俗的な祝祭音楽である。かつてルネサンス時代にガブリエル兄弟らによる〈ヴェネツィア楽派〉があったように、まさに18世紀のヴェネツィア音楽〔注〕である。この時代のヴィヴァルディやアルビノーニ、ガルツピを改めて聴きたくなる。カナレットも色々な角度から何度もこの祝祭の場面を描いているという。ゴンドラを漕ぐ人々の個性が面白く、奥まで連なる見物する波止場の群衆にも驚く。

24 「ロンドン、北側からウェストミンスター橋を望む、金細工師組合マスターの行進」 1750年頃

すごい広角レンズの画界である。このような広い実写的な絵を絵画史上は初めて見る思いである。実に広々とし、同時代の出来事を精密に描いているが、視界はややフィクションであるという。しかし、そうは見えない。新市長就任日を描いているとされ、やや中央に市長が乗った青い屋根の大型平底舟、横に赤い屋根の金細工師組合の船らしき、その他の大型の船やたくさん的小舟。テムズ川に架かるウェストミンスター橋、その飾りや石壁。右側から、セント・マーガレット聖堂、ウェストミンスター寺院、ホール、セント・ステイヴン礼拝堂、セント・ジョン聖堂の4本の塔、遠くランベス宮殿の4本の塔、セント・マーガレット聖堂の塔と描き、遠景の微かな山が広大さを助長しているようか。



25 「ロンドン、テムズ川、サマセット・ハウスのテラスからロンドンのザ・シテイを遠望する」1750年頃

画面左端に、一家がテムズ川沿いを散歩し、木立に戯れた人たちの風景画で実に素晴らしい。

左手前からサマセット・ハウス、セント・ポール大聖堂、ザ・シテイに立ち並ぶ彼方まで続く尖塔。そして得意のたくさんの小舟。帆船が2艘。洒落た船着き場も。

26 「ロンドン、ヴォクスホール・ガーデンズの大歩道」1750年頃

ヴォクスホール・ガーデンズは遊園地という。遊園地の広い大通りの右の小建物は、楽団のためのパヴィリオンからオルガン・ハウス、トルコ風食事を提供するテント、そして道の遠い消失点に置かれているのは曙の女神アウロラ。歩いている人より、かたまって何やら話し合っているのが多い。近い人たちは気楽に音楽を聴いているのだろう。遊園地には他に、ゴシック、古典主義、中国風など様々な建物や人口の廃墟、彫像、柱廊、レストランなどが並んでいるという。夕方5時開園だが、ロンドン日は日が長いので夜9時まで明るい。夕闇になると、ランプが眩しく灯り、透かし絵が目を楽ませたという。入園のチケットがウィリアム・ホガース(1697-1766)のデザインで人気があったという。

27 「ロンドン、ラネラーのロトンダ内部」1750年頃

ラネラーはヴォクスホール・ガーデンズと並ぶ遊興施設という。巨大な円形劇場があり、主に楽団と合唱、オルガンの音楽が開催され、階段風な演奏席に演奏者たちがいる。円形の周囲に52のボックス席が囲んでいる。中央に柱に囲まれて暖炉と煙突。たくさんシャンデリアが天上から吊るされた円形の広い間で、人々それぞれ何をしているのだろう。

28 「ローマ、パッツォ・デル・クイリナーレの広場」1750-51年頃
下敷きはホマー・ワウターズの版画で、ローマを描くに定番の名所。

広大な教皇公邸と、その前のクイリナーレ広場。公邸の守護兵や屋上の人々も描かれ。左の近景としての、二頭の馬と二人の人物がいる左の像は、当時では古代ギリシアの彫刻家プラクシテレスやフェイディアスの作品だと考えられていたが、現在では古代ローマで信仰されていたカストルとポルクスを表した像とされる。カナレットのほどの腕前ならば像だけアップした作品もかなり実際に描けただろう。どんな歴史画あるいは神話を描くのか想像したくなる。広場に二頭馬車二台の上を含めたたくさんの人たちがいて、太い切り株に腰掛けている夫人は何をしているのだろう。

「サン・マルコ広場」同様、東京富士美術館の收藏である。ともにもう一度見たいものである。

29 「ナヴォナ広場の景観」1750-1761年頃
先の「クイリナーレの広場」と対になる作品で、同じく下敷きはホマー・ワウターズの版画でローマを描くに定番の名所。本作も東京富士美術館の收藏。

画面中央付近に高くそびえ立つサン・タニエーゼ聖堂の円蓋。広場の中央にあるのはベルニーニによる「四大河の噴水」。一頭あるいは二頭馬車や人々がたくさん描かれている。

後期のカナレットの特徴である、整然とした建築の描写、暗めの色調やコントラストが強くなり始めた陰影などが現れているという。

30 「昇天祭、モロー河岸のブチントーロ」1760年

元首公邸やサン・マーガレット大聖堂、サン・マルコ小広場、聖マルコと聖テオドルスの柱、船溜まりなど昇天祭のモロー河岸。豪華なブチントーロ（御座船）を始め何艘もの船。

きらきらとした光の反射を表すのに、明るい色を点状に散りばめる描写。多彩な人物描写も、頭部に置かれたハイライトが点々と光っているように見える。最も明るい部分を点で描くやり方は、晩年の特徴とされる。同時に色調も少しずつ暗さを加えて明暗のコントラストを強めていく。

イギリスのジョセフ・スミス（銀行家）とマクスウィーニー（元興行師）、リッチモンド公爵、他にヴェネツィアの名門貴族でコレクターのザグレド、ルツカの承認でコレクターのコンテイ、さらにリヒテンシュタイン公やベッドフォード公爵など枚挙に暇がないとされる。

第3章 カナレットの版画と素描——創造の周辺

18世紀、油彩画や版画を制作するに、まず準備素描から始める。カナレットにも沢山の準備素描が残されており、単体で完結されていると思われる入念な素描も制作している。版画では、カナレットの原画が彫版されたものもあるが、カナレット自らが彫り自画自彫であり画家にして版画家でもあった。

『カナレット版画集』：一七四〇年以降の刊行で、カナレット唯一の版画集（31点）。ブレンタ川に沿ってパドヴァまでスケッチ旅行をした際に生まれたものという。銅板の技術をヴィゼンティーニから学んだと推測されている。

本展ではその中の、町田市立国際版画美術館蔵の「マルゲラの塔」「メストレ」「河岸の眺め」、静岡県立美術館蔵の「ドーロ風景」「ランタンのあるポルティコ」の5点を陳列。

静岡県立美術館蔵と同じもので第3ステート。銅板のエッチングを紙に印刷か。ドーロは街の名。塔や建物、船や川際の様子が詳細に描かれている。水面と波の光り具合や突き出た杭の並び、ひと人の仕草などしばらく視線を巡らされてしまう。あちこちに日常の物語を感じてしまう。スケッチ旅行の意気込みと意義や楽しさも伝わってくる。



37 「河岸の眺め」1774年以降に刊行

「メストレ」と「ランタンのあるポルティコ」も素晴らしいが、取り分けて「河岸の眺め」に感嘆！なぜ撮らなかつたのだらう。近景に土手の植生や地面と小川の橋、テーマであるが如くの本の樹木、中景のブレンタ川と岸辺の建物の並び、遠景の屋根の並びに塔、そして空と雲。実に今日的描写の景色である。（左画像は図録から）



41 レフレックス・カメラ・オブスキュラの展示

東京富士美術館のもの。部屋を完全な暗室にして窓側に小さな穴を開けると、反対側の壁に屋外の眺めが天地左右反転した形で映し出される。これがピンホール・カメラの原理であるが、古くは中国の墨子、10世紀アラビアのアルハゼンらによる言及がある。これにより透視図法に沿った画像を得ることができる。カメラ・オブスキュラは19世紀初頭に製造されたようである。



第4章 同時代の画家たち、後継者たち

——カナレットに連なる系譜の展開

カナレットの影響を受けたヴェドゥータの画家マリエスキ、ベロツト、グアルデイ、そして初めて知るフランチェスコ・アルボット(1721-92)。英国に約十年間滞在したカナレットの影響でウィリアム・ジェームズとウィリアム・マローが景観画を描き始める。

なお、入手困難なほど人気の高かったカナレットらは旧制の画家信心組合に籍を置いていた。人物画の制作を専らとするエリート意識のある画家たちが、一六八二年に新制人物画家組合を設立。一七五〇年にヴェネツィアのアカデミーが設立されるまで、この組合は敷居が高くグアルデイなどは登録が許されなかった。ヴェドゥータの画家たちは人気や評判とは裏腹に、画家の世界ではこのジャンルがまだ低く見られていた。

42 ミケレ・マリエスキ 「リアルト橋」 1760年頃

マリエスキ(1710-43)はヴェネツィア生まれ。大運河のほぼ中央に架かるリアルト橋。16世紀に大理石で建設されたヴェネツィア最古の



橋。橋の上には色とりどりの露店が軒を連ね、赤、青、黄色のひさしが並ぶ。兩岸の建物には日除けやカーテンが。それらは運河の波紋の光の反射と共に、16世紀に黒に統一されたゴンドラと対照的である。リアルト橋周辺はヴェネツィアの商業活動の中心地の一つであり、あちこちで大げさな身振りややり取りをする人々、ゴンドラや渡し船とそれらを操る漕ぎ手たちなど、水の都のエネルギーシユな日常風景が広がる。船の上の樽に乗って舳むぎ綱を杭につなごうとしている水夫の格好に目が行く。マリエスキの装飾的で演劇的な構成が発揮された作品。

44 作者不詳「カナル・グランデ・サンタ・ルチア聖堂とスカルツィ聖堂、ヴェネツィア」 1740-1760年頃

ヴェドゥータの一番北に位置する大運河の光景。左にサンタ・ルチア聖堂、中央にサンタ・マリア・デイ・ナザレ聖堂。かなりな写実描法で、重量感のある絵に覚える。現在はサンタ・ルチア駅を下りると大運河以外は様変わりしているという。

43 ベルナルド・ベロツト「ルツカ、サン・マルティーノ広場」 1742-1746年 (下の画像)

トスカーナ州北西部のルツカ、そのサン・マルティーノ広場。画面奥に大聖堂。整然とした広場が、建物と空の調和のもとに人物たちと動物



や馬車が巧みな配置など、破綻のない、洗練された構図の中に、石や煉瓦の一つ一つの質感を捉えた丁寧な細部描写であり、生真面目な作品。一七四二年に二十歳のベロットがローマ旅行に出かけ、ルツカに立ち寄った成果。海外で活躍したベロットの、国内に取材した青年期の貴重なヴェドゥータ。

カナレットの甥であり、自身もカナレットを名乗ったベロット(1722-80)はドレスデンやワルシャワで活躍し当地のヴェドゥータをたくさん残す。「Columna 都市の復興とヴェドゥータ(矢追愛弓)」によれば、第二次大戦で連合軍に8割以上破壊された「エルベ河畔のフィレンツェ」と呼ばれた文化都市ドレスデンと、ナチスに8割以上も破壊されたワルシャワの復興にベロットの作品が参照された。

- 45 フランチェスコ・アルボット「アーチのある空想的ヴェドゥータ」
- 46 同「騎馬像とオベリスクのある空想的ヴェドゥータ」
- 47 同「ラグーナのある村の空想的ヴェドゥータ」
- 48 同「パラッツォのポルティコとオベリスクのあるカプリツチョ」

以上の四点は図録にはあるが他所で展示予定。

アルボット(1721-57)はマリエスキの弟子で、いずれもマリエスキの原画を模したもの。マリエスキの死後、アルボットはマリエスキの未亡人と結婚して店を引き継ぎ、「第二のマリエスキ」と自称した。

因みにネットで探してみるとアルボット「ヴェネツィアのドウカー

レ宮殿」「ヴェネツィア税関」なども見られ、さらに他のヴェドゥータ画家としてカルロ・グルバスの「Riva degli Schiavoni」やヴェネツィアの「Der Dogenpalast」、アントニオ・ジヨリ「西に見えるヴェネツィアのサンマルコ教会」なども知れる。ヴェドゥータはやはりに今でも人気があるのだ。



49 フランチェスコ・グアルデイ 「小さな広場と建物のあるカプリツ
チヨ」 1759年 東京富士美術館 (前頁の画像)

グアルデイ(1712-93)。広場の正面に歴史を感じさせる崩れかかった
建物、様々な人の中、右側を指さす子供を連れた赤いマントの男、その
差す方向に籠を持っている女、どこか物語が始まりそうである。すべて
が前景から奥へと収束し、深い奥行きを感じさせる空間を作り出して
いる。遠近法と色彩配置を駆使したグアルデイ中期の作品という。

50 フランチェスコ・グアルデイ

「サンタ・マリア・デッラ・サルテー聖堂」 1770年頃

51 フランチェスコ・グアルデイ

「サン・ジョルジョ・マッジョーレ聖堂」 1770年頃 (下)

グアルデイには珍しい縦長の、しかも対の作品という。大運河を挟ん
での両聖堂であり、サンタ・マリア・デッラ・サルテー聖堂は17世紀
のバロック建築、サン・ジョルジョ・マッジョーレ聖堂は16世紀ルネ
サンスの建築家の設計による。前者の絵には隣接するヴェネツィア総
主教神学校とサン・グレゴリオ修道院が描かれている。

グアルデイは宗教画や神話画、人物画などを主に描いていたが、カナ
レットが英国へとヴェネツィアを離れた後に高収入となるヴェドワー
タを描き始めたと推測されている。初期は明確な輪郭線と固有色を用

いたやや硬い画面から、より軽やかなタッチと色彩によってキラキラ
と光る水面の反射や大気の移り変わりを捉える方向へと徐々に変化し、
それとともに正確な景観描写は減少していったと。晩年はターナーや
印象派など19世紀以降の画法の先駆けと思われる作品も見られると。



52 グアルデイ 「塔の遺構と彼方に村のある川辺の風景」 1770-80年

構図や色調がよく似た後期の対の作品の一つ。風景要素と人物たちが穏やかな遠近法によって描かれ、平坦な地形に変化を添えている。中央に川が流れ込み釣り人がいる。向こうに廃墟となった塔、一艘の船が辿り着いた対岸に聖堂のような建物。その背後の丘に大規模な邸宅、背後に青く広がる丘あるいは山が見える。



53 グアルデイ 「塔の遺構のある丘の風景」 1770-80年 (次頁上)

対になっているもう一つの作品。どちらも水彩画家かなと思うくらい軽い彩色といえようか。しかも、休日の休憩を目的とした気晴らしが感じられ平和である。色彩の光でどこか印象派に通じるものを覚える。撮影した写真は証明の影響だろう茶系の暖色トーンになってしまったが、図録では実際に見たようにもつと青と緑がかつた絵である。

こちらは高低さのある地形。複数の人物群となだらかな前景に中景に丘があり、さらに向こうに廃墟の塔がそびえる隆起した丘が連なる。円形にはぼんやり青い山が浮かぶ。

塔の遺構のモチーフは、廃墟趣味のカプリッチョや風景画で知られるマルコ・リッチ (1676-1730) からの影響が指摘されている。ネットによると、リッチはヴェネツィア近郊のベルーノ出身で、画家の伯父に教わり、その後ローマに出て風景画のスペシャリストとして活躍したという。一七三〇年にヴェネツィアで逝去。ネットで作品を少し知れるが、気になる画家である。理想的風景画風なのだが農場や牧歌的情景、森の中などの他「嵐のような風景」「疾風の船」などやや強烈な画もある。もしかしてカナレットもグアルデイより先に影響を受けていたのではと考えたくなる。

グアルデイは「機知に富む」画家と言われ、その創意力は生前から評価されていた。



54 ウィリアム・ジェイムズ

「スキアヴォーニ河岸、ヴェネツィア」 東京富士美術館

生没年不明の画家だが、カナレットの弟子か助手とされる。カナレットの影響が明らかで、やや高質で味気ない画風であるが、どこか若々しく新鮮な鮮明さを覚えてしまう。



55 ウィリアム・マロー「カプリツチョ」

セント・ポール大聖堂とヴェネツィアの運河」1855年頃

マロー（1740-1813）。ロンドンのセント・ポール大聖堂とヴェネツィアの大運河という異なる土地のランドマークを合体させた大胆な発想とスケールによる建築的構成で、虚構の大空間を創造と。マローの弟子であるジョン・カーティスが本作を基にした版画を出版している。

第5章 カナレットの遺産

風景画の世紀ともいえる19世紀にヴェネツィアを描いた英仏の画家たちを取り上げている。

ターナー、同時代のウィリアム・ジェイムズ・ミュラーとボニントンに、風俗的要素の加わりや大気や光に対する画家の感覚が自由闊達なタッチで臨場感あふれる画面が現れる。また、ロマン主義が反映するかのようにエティやホランドに、背の高い建物が影を落とす狭い水路に逸話的要素がひっそり挿入される。あるいはウッズやシッカートが自身の関心のままに街を大胆な構図で切り取り、ホイットスラーは革新的な態度で画面全体を色彩の調和に仕上げる。

ブーダンが印象派の先駆となり、シニヤックは眩い光の装飾的な描法に還元し、モネは神秘的で幻想的なイメージを増幅させた。

56 ウィリアム・ミラー「ヴェネツィア、ピアツェッタ」1854 版画

44歳のターナーが一八一九年にイタリアを旅行し、ヴェネツィアを訪れた。この街に魅了され、多くの作品を残すことになった。その一つに基づいて、ターナーに信頼のあった彫版師ミラーが版画を制作。

図書館側から見たピアツェッタ（サン・マルコ小広場）。元首公邸と2本の柱（聖マルコを象徴する有翼の獅子像を載せた柱と、聖テオドロスを載せた柱）。2本の柱の間に、対岸のサン・ジョルジョ・マッジョーレ聖堂。広場の群衆は不安な様子を漂わせている。かつて2本の柱の間にロープを渡し公開処刑が行われていたという。

57 ウィリアム・ジェイムズ・ミュラー「ヴェネツィアの canal・グラデ サンタ・マリア・デッラ・サルテ聖堂を望む」1857年（次頁）

光が玉となって透け運河の水面が鏡のように反射し、何とも澄んだ晴朗さに圧倒され、感動した作品。現代の技巧ある油彩画かと感嘆！

右側に天使や聖人の像に囲まれたサンタ・マリア・デッラ・サルテ聖堂のクーポラの優美な姿。図録ではよく分からないが、ずっと向こうの税関倉庫の端の上に、2体のアトラス像が支える球体の上に立つ、旗を持ったフォルトウナの像が設置されているという。

なお、フォルトウナ (Fortuna) は、ローマ神話に伝えられる運命の女神。命の車輪を司り、人々の運命を決めるといふ。英語の [Fortune]



の語源とされ、ギリシア神話のテュケー(Τυχη)に相当する。運命を操るための舵を携えており、運命が定まらないことを象徴する不安定な球体に乗り、幸運の逃げやすさを象徴する羽根の生えた靴を履き、幸福が満ちることのないことを象徴する底の抜けた壺を持っていると。

ミュラーは一八三四年に友人のフリッツプと七か月のスケッチ旅行に出かけた。ベルギー、ドイツ、スイス、イタリアと旅する中で、ヴェネツィアには二か月程も滞在している。ミュラーは船頭を雇いゴンドラに乗り運河を周ってスケッチを行ったが、河面からの眺めという構図により臨場感を持って描かれ、それが実感される。

58 リチャード・パークス・ボニントン

「ヴェネツィア、カナル・グランデ」 1838年 (次頁)

ボニントンはヴェネツィアに四週間滞在。その際の油彩スケッチの一つ。春のヴェネツィアを開放感あふれる景色に。サンタ・マリア・デッラ・サルデーテ聖堂が陽光を受けて白く輝いている。細部描写をしないで、生来の優れた色彩感覚と、水彩画のような透明感を持つ独特の優美でなめらかな油彩技法でと。

一時期ボニントンとアトリエを共有していたドラクロアが、友人ボニントンの作品を「目を喜ばせ、うっとりさせるダイヤモンドのよう」だと記しているという。



59 ウィリアム・エティ 「溜息橋」 1833-1835年

人物画を得意としたエティ（1787-1849）は、一八二二年十一月から翌年の六月までヴェネツィアに滞在。その十年後に本作を作成。作成したのは一八三三年のロイヤル・アカデミー展に出品されたターナーの「溜息橋、パラッツォ・ドガーナ」制作するカナレット」が好評を博したことが動機のひとつであったかもしれないという。

本作は、細い運河を挟んで左は9世紀に建設された元首公邸、右は17世紀に建設された牢獄で、両者の上層で小さな窓のある大理石の橋でつながれている。投獄される囚人が、窓の向こうに広がるヴェネツィアを見られるのもこれが最後と溜息をついたという。

60 ジェイムズ・ホランド 「ヴェネツィアの思い出」

「ヴェネツィアの裏町を流れる細い水路。建物の隘路を差す光を遮り、水面のエメラルド・グリーンはその深みを増している」。隘路の先に太陽の光を受けて輝いている鐘楼と壮大な建物。「ヴェネツィアの「表」と「裏」の顔を対照的に表しているようだ」「手前の狭く暗い運河から奥の明るい光に照らされた建物へ、見る者の視線を誘導する本作の構図は、ホランドが好んで用いたもの」という。

61 ジェイムズ・アボット・マクニール・ホイットスラー「ノクターン…青と金色——サン・マルコ大聖堂、ヴェネツィア」1880年

ホイットスラー(1834-1903)はアメリカのマサチューセッツ州生まれで、土木技師であった父が鉄道建設の仕事のためロシアに移住するのに従い数年間をロシアのサンクトペテルブルクで過ごした。その後パリで美術を学び、主にロンドンで活躍したが、生涯や作風がよく知られた画家であろう。

「一八七九年当時、日ごろの贅沢な暮らしぶりに加え、自作を酷評した批評家ラスキンを名譽棄損で訴えた裁判に莫大な費用がかかったこと、有力なパトロンを失ったことで破産していた」。幸いにもロンドンの画商から制作のための資金援助を受け、結局十四か月以上ヴェネツィアに滞在。その間経済的に困窮していたが、英米から来た若い画家たちからも援助があり制作できた。しかし油彩は少なく、その一作。夜のサン・マルコ広場と繰り出した人々の情景というが、絵が暗く不明瞭であり私にはよく分からない。色彩と形の調和を追求し、闇と光が織りなす色彩のハーモニーを描き出そうとしたのだろうといわれる。

ホイットスラーはヴェネツィア滞在中、フランス語と同程度に流暢にイタリア語を話せるようになり、ヴェネツィアの英米人のコミュニティの中心人物となったという。

62 ヘンリー・ウッズ 「サンティ・ジョヴァンニ・エ・パオロ広場、ヴェネツィア」 1895年

ヴェネツィアに魅せられ定住した英国の画家ウッズ(1814-1887)に

よる、眩い光に照らされた広場とサン・マルコ大同信会の建物。様々な年齢・服装・階層の人々の日常生活が描かれているという。左側は橋と運河だろう。描写の正確さに定評があったという。街の一角と人々の仕事をいろいろ想像し楽しめる作品である。



cf. シェミラツキ (1814-1887) について

ウヅズをネットで色々と調べている最中に、ポーランド家系でハルキウ(ハリコフ)州生まれのロシア画家ヘンリク・シェミラツキ(1843-1902)を知る。アカデミックな画法で聖書の主題や古代、神話の場面を描いた画家。人生のほとんどをローマで過ごし、永遠の都ローマの美しい風景が彼の芸術の中に映し出されているという。ネットで各作品を見ると、背景の風景が光に満ち清澄明瞭で、意味ある人物と所作、衣装も鮮やかな色彩に富む。実物を見ているのではないので何とも言えないが、アカデミズム絵画のすごさに圧倒される。小生はやはり、印象派以後の近現代絵画史の大画家は何のその、根本的に写実を基本にした画法が好きなのだとつくづく自覚され、それらの大作に圧倒されてしまふ。『剣舞』1881、『カプリ島のテイベリウス時代の酒神祭』1881、『奴隷の歌』1884、『神々の模範に従う』1888、『危険なレッスン』1895、『ローマ、村』1899、『ヘタイラで弟子アルキピアデスを見つけるソクラテス』1873、『リヴィウ劇場のオペラとバレエの幕』『ローマの牧歌―釣り』など。

63 ウォルター・リチャード・シツカート「サン・マルコ大聖堂の一角、ヴェネツィア」1901年頃

64 ウォルター・リチャード・シツカート「サンタ・マリア・デッラ・サルデーニャ、ヴェネツィア」1901年頃

ホイットスラーに影響され彼のアシスタントも務めドガにも影響されたドイツ出身の画家シツカート(1860-1942)は、一九〇〇年の夏にヴェネツィアに来て、一時帰国を挟んで翌年の7月まで滞在という。「複雑に組み合わせられた固い建物の表面が醸し出す量感を表現」し、「濃密な色彩とドラマチックな明暗のコントラスト」により重厚な存在感を与えているとされる。よく知られた画家だが何かフォービスムの絵を感じさせ、個人的には若い時に美術史的に興味を持っただけでこの手のラフな筆致の作品にはあまり感動しない。さらに、殺人事件の真犯人に見なされた画家で、作品によってはそれが鑑賞の邪魔をするのかもしれない。

65 ウジェーヌ・ブーダン「カナル・グランデ、ヴェネツィア」1895年

シツカートと違って好きな画家である。海景画家ともいうべきブーダンがヴェネツィアを意識したのは一八六〇年代にルーブル美術館でグアルデイの模写をした時だった。その三十年後の一八九二年に初めてヴェネツィアを訪れ、三度目にして最後のヴェネツィア旅行となった一八九五年には二か月滞在し70点以上もの油彩や素描を残した。本作は「空の王者」の渾名に相応しく画面内に空を大きく取り込んでいる。「水面に反射する建物のシルエットをさざ波の合間に浮かび上がせる描写は秀逸である」「画家の関心は、地誌的な正確さよりむしろ、空

と海に挟まれた街を包み込む大気や光の描写にあるといえよう」。それまでに海景画で名をなしたフェリックス・ジアン（1821-1911）の、灼熱のヴェネツィアに対して、霧がかかった穏やかな大気を重んじ、目にした自然現象に忠実であろうとした。

因みに、ジアンはマルセイユで美術学校を始め、多くの学生を集めた。港町マルティグの風景をよく描き、後にそこにジアン美術館が設立される。一時期パリに移りルソーやミレーと親友になり、バルビゾン派の影響を受けた。

66 ポール・シニャック 「ヴェニス、サルテ教会」 1908年

スーラ没後の新印象主義の理論的推進者シニャック（1863-1935）は、一九〇四年と八年の二度ヴェネツィアを訪れた。後者の訪問で、元首公邸に近い河岸に約一か月半滞在し、11点の油彩と多数の水彩素描を残した。世紀転換期を過ぎた頃、スーラの影響を脱し、「より大きな色点を規則的に配列したモザイク状の特徴を示す」。

67 クロード・モネ 「パラッツォ・ダリオ、ヴェネツィア」 1908年

68 クロード・モネ 「サルテ運河」 1908年

一九〇八年に妻アリス同行で初めてヴェネツィアを訪れる。9月から12月までの二か月半滞在し、静養を目的とする旅であったが、37点の油彩を描き上げた。街の大胆なトレミングが顕著。《睡蓮》連作の展

開の只中であつたが、それを除くと《ヴェネツィア》連作は最後のシリーズとなった。

因みに、図録には「黄昏、ヴェネツィア」（1908年頃）も掲載されている。石橋財団アーティゾン美術館所蔵である。水面の青、緑からオレンジ、紅へとグラデーションしては水平線で海と空が溶け合い、そして空の緑、青へとグラデーションしていく。

【ヴェネツィア共和国の終焉 ナポレオンの侵攻と都市改造（岡坂桜子）】から

5世紀のフン族の王アッティラが北イタリアへ侵攻した時からヴェネツィアの歴史が始まった。そして六九七年、初代ドージェ（元首）の選出による共和国誕生。14世紀から15世紀にかけて、地中海貿易により「アドリア海の女王」の異名とともに「いとも高貴なる共和国」は全盛期を極める。カナレットが生きた18世紀に斜陽を迎え、18世紀末には近代的な主権国家を形成しつつある周辺の外国勢力に息を止めることになる。

一七八九年にフランス革命が起こる。その後の混乱期にイタリア方面軍司令官に昇進したナポレオンが、イタリア北部の領土を拡大すべく「イタリア遠征」を展開。オーストリア軍を破ってロンバルディア地方の各地を次々に占領。一七九七年にヴェネツィアに無条件降伏を要

求。ヴェネツィアは正式にオーストリア領となる。ここに自治共和国として歩んだ二一〇〇年の歴史が終わる。

一八〇五年、皇帝ナポレオンがアウステルリッツの戦いで墺露連合軍に勝利し、ヴェネツィアはフランスの支配下に入る。ナポレオンのイタリア王宣言に伴い、ヴェネツィアもミラノを首都とする「イタリア王国」に組み込まれ、ナポレオン失脚の一八一四年まで続く。この間、ヴェロナーゼ「カナの婚礼」など多くの美術品がパリに送り込まれた。

なお、ゲートルは一七八六年に17日間ほど滞在している。

【水の都のガラスの軌跡（根本耕太郎）】から

ヴェネツィアン・ガラスの源流は二千年前の古代ローマのローマン・ガラスまで遡る。西ローマ帝国崩壊（四七六年）後に、旧ローマ帝国の地中海東岸やイスラム地域にガラス製法が継承され、10世紀にイスラム・ガラスとして発展した。

イスラム・ガラスは、東方貿易を担うヴェネツィア共和国の主要な輸出品の一つであった。一〇〇〇年にクロアチアの内海を撃退して地中海制海権を掌握すると、12世紀には東方ガラス生産の中心地であったシドンや、ガラス原料の原産地であったティルスを植民地とし、イスラム・ガラスの制作技術を吸収し、やがて自国でガラス制作に乗り出した。

ヴェネツィアでは13世紀半ばにガラス同業者組合を結成し、火災か

ら街を守るため、また製造技術が他国に漏れるのを防ぐためにも、製造業者や職人を全てムラーノ島へ強制移住させた。

無色透明なガラスが製造されたのは15世紀ヴェネツィアでのことだった。さらにアンジェロが錬金術の師から学んだ技術を生かして天然水晶のような、より無色透明なガラス「クリスタツロ」を生みだし、アンジェロは他に白磁のような色味の乳白ガラス「ラッティモ」や縞瑪瑙のような多色ガラスも考案した。

16世にはヴェネツィアのブラーノ島で生産された秘伝「レース・ガラス」が誕生。

図録に学んで改めてヴェネツィアン・ガラスの魅力を覚える。レース・ガラス皿やワイングラスの紋様、そして乳白瓶のままの白さに感嘆し、会場でよく見なかったことを少し後悔している。

【カナレットとカメラ・オブスキュラの映像について（新田健史）】から

現在では、カナレットは携帯できるカメラ・オブスキュラを、大まかなメモ程度に使ったとされる。ヴェネツィア絵画の伝統の中で15世紀のベツリーニやカルパッチョは精密な透視図法を駆使しており、カナレットの同世代でもティエポロも透視図法に精通しており、カナレットも同様であろうと。カナレットの景観画の先達であるヴァンヴィテッリも既に空気遠近法的にだがカメラ・オブスキュラを使用していて、

カナレットの場合は遠景も明瞭さを失わずむしろ写真の映像に近く、そのようにカメラ・オブスキュラを利用したと考えられる。それはグラント・ツアーの欲望に応えるやり方だったと考えられるという。

もう一つ重要な光学機器としてクロード・グラスがある。ガラスの裏面が銀ではなく黒や褐色などの色が塗られた鏡で、暗く彩度が落ちた状態で写るが、鏡面を自分の方に向けつつ風景も移すようにする。今日の自撮りの方法である。「クロード・ロランの絵のようだ」という意味で「クロード・グラス」と呼ばれたらしいという。実は、イタリア土産として人気があったのは肖像画であり、注文主は自らを由緒ある建物や美術品と共に描き込ませる。ヴェドゥータには依頼人が登場するとはあまりないように思われるという。

【作家解説】 から抄

フランチェスコ・アルボット (1721-57)

ヴェネツィア生まれで、マリエスキの徒弟になったとされる。自ら「第二のマリエスキ」と名乗った。一七四四年にマリエスキの未亡人と結婚。

ヤーコポ・デ・バルバリ (1460/70頃-1516 以前)

アルプス以北の宮廷を渡り歩いた遍歴の画家。ヴェネツィアで修業時代を過ごしたと考えられている。代表作「ヴェネツィア鳥観図」。ニルンベルクで宮廷画家として活動中にデューラーと交流。宮廷画家に就任したクラナハとも接点を持つ。

ベルナルド・ベロット (1722-80)

ヴェネツィア生まれ。母がカナレットの妹。一七四七年にドレスデンへ移り宮廷画家となる。ウィーン滞在中に女帝マリア・テレジアの注文を受ける。一七六四年にドレスデン美術アカデミーの遠近法教授となる。一七六七年にワルシャワに居を移し宮廷画家となる。

リチャード・パークス・ボニントン (1802-28)

イングランド中部ノッティンガム出身。一八一七年に一家でフランスのカレー、その翌年パリに移住し、一九年からアントワーヌ・ジャック・グロのアトリエに学ぶ。同じ頃、ルーブル美術館に通って16-17世紀のオランダ、フランドルの風景画やイタリア・ルネサンスの肖像画を模写。一八二四年のサロンでコンスタブルとともに金メダルを受賞。ロンドンでドラクロアと親しくなり、しばらくアトリエを共有した。二八年セーヌ河でスケッチ中に 日射病で倒れ、それが基で二十五歳の若さで夭逝。

ウジェーヌ・ブーダン (1824-98)

ノルマンディー地方の港町オンフルールに水夫の子として生まれる。青年期に対岸のル・アーヴルに移住して画材や額縁を扱う店を開き、ここを訪れたクチュール、ミレー、トロワイヤン、イザベイに影響を受け、本格的に画家の道を志す。ル・アーヴル市の奨学金によりパリに出て3年間絵を学ぶ。その後は故郷ノルマンディーやブルターニュ地方を制作拠点とした。

水平線を低い位置に設定し空を大きく取り込んだ海景画を得意とし、コロアをして「空の王者」と言わしめた。青年期のモネに戸外制作の重要性を説いたことで知られる。印象派の先駆者といわれる。

ウイリアム・エティ (1787-1849)

イングランド北部のヨーク生まれ。父は腕の良いパン職人。十八歳まで凸版印刷業者の植字工として働いた。一八〇五年に伯父を頼ってロンドンに移り住み、見習い期間を経て〇八年にロイヤル・アカデミー・スクールに入学。一年にロイヤル・アカデミー展に初入選。ヴェネツィア派やルーベンスの影響下に、英国では珍しい官能性豊かな裸婦を描いた。一八二二年から二三年にかけてヴェネツィアに七か月滞在し、描くスピードの速さと巧みさから「悪魔」と綽名された。一八四八年にヨークに帰郷し、その翌年六十三歳の生涯を閉じた。

フランチェスコ・グアルデイ (1712-93)

ヴェネツィアの画家一家に生まれる。父ドメニコの後を継いだ兄ジャン・アントニオの工房を手伝い、画家として活躍し、一七五〇年頃独立。「著名なカナレットの良き弟子」とも言われた。晩年は、華やかで壮観な都市の祝祭イベントの描写に優れた画家として認められていた。一七八四年に「遠近法画家」としてヴェネツィアのアカデミーのメンバーに選ばれる。

ジェイムズ・ホランド (1799-1870)

イングランド中西部スタッフォードシャーのバーズレムで陶磁器工房を営む一家に生まれる。十九歳まで近くの陶磁器工房の絵付け師として働き、絵を独学で学び一八二四年にロンドンに移り住んでロイヤル・アカデミー展に初入選。後にビクトリア女王に絵画のレッスンもしたとされる。二〇年代後半にポントントンと出会い、風景画に取り組みだす。一八三五年以降死去する直前まで繰り返しヴェネツィアを訪問し、滑らかで生き生きとした線描と、煌めくような色彩でヴェネツィアの景観を描き人気を博した。

私生活では最初の妻に加えて八人の子供のうち六人まで先立たれた悲しみの多い生涯であった。

ウイリアム・ジェイムズ (生没年不明)

「主にロンドン近郊の眺めを描く風景画家」。一七六九年から七一年にロイヤル・アカデミーの展覧会に参加。そののうち、ロンドンの風景画を2点出している。

ミケール・マリエスキ (1710-43)

ヴェネツィア生まれ。十五歳で父を亡くし、一家は貧民家族一覧に記載された。祝祭の舞台装飾を制作していたが、複数のヴェドゥータの注文を受けるようになり、旧制画家信心組合、新制人物画家組合に所属し、後者では評議員に任命されている。集大成の銅版画集を刊行。三代前半の若さで逝去。

ウイリアム・マロー (1740-1813)

ロンドン生まれ。海景画を得意とした風景画家サミュエル・スコットの弟子。一七六五年から翌年にかけてフランスやイタリアを旅行し、その成果は大陸の風景を主題とする絵画に結実した。一七九五年に、マローの弟子とされる風景画家ジョン・カーティスにより6点の銅版画集『イタリア風景』が刊行された。

cf. サミュエル・スコット (Samuel Scott, 1702-1772)

川沿いの風景や海景で知られるイギリスの風景画家。

「ナイン・エルムの眺めを持つ夕日」1750 - 1760 実にいい！

他に「エストミンスター橋の建物」1742…テムズ川に架かるウエストミンスター橋の景観。

ウイリアム・ミラー (1796-1882)

エディンバラに生まれる。版画家の弟子になり、後に自身の工房を開く。一八一九年にロンドンに移り、版画家ジョージ・クックの下で働いた。一八二一年にエディンバラに戻る。ターナーが彫版を任せた彫版師の一人。

クロード・モネ (1840-1926) …省略

ウイリアム・ジェイムズ・ミュラー (1812-45)

ブリストルに生まれる。父は博物学者で、十二歳の時に父の仕事先で博物学や地質学の標本を描いた。十五歳の時から風景画家ジェイムズ・ベイカー・バインのもとで学ぶ。生涯において幾度か長期のスケッチ旅行を行う。ベルギー、ドイツ、スイス、イタリア、ギリシア、エジプト、そしてカイロからナイル川を遡る体験をする。トルコのリュキア探検にも参加。三十三歳の若さで没した。

ジョヴァンニ・パオロ・パニーニ (1691-1765)

ファルネーゼ公爵領下のピアチェンツァに生まれる。同地でファル

ネーゼ家の宮廷画家に学んだとされる。一七二一年二十歳でローマに移り工房に通い、一七年以降ヴェドゥータの制作を始める。その正確な建築物の描写はヴァンヴェッリの影響が指摘される。聖ルカ・アカデミーの会員となり、透視図法の教鞭を執る。古代遺跡や廃墟、聖堂や宮殿などの美しい景観に優雅な人物を配し景観画や祝祭記念画で人気を博し、ローマのヴェドゥータ画家として名を馳せた。聖ルカ・アカデミーおよびローマのフランス・アカデミーの総裁となる。18世紀中頃のローマにおいて重要な役割を果たした。

ウォルター・リチャード・シッカート (1860-1942)

ミュンヘンに生まれる。父はデンマーク人の画家で、母はイギリスの天文学者の娘。家でロンドンに移住し、ホイットスラーの助手となる。ドガと出会い多大な影響を受ける。一八九五年以来度々ヴェネツィアを訪れる。一八九五年から主にイギリスとフランスで精力的に作品を発表。絵画教師としても活躍し、一九二七年にはウィンストン・チャーチルに絵画のレッスンをした。ロイヤル・アカデミーの会員となり、死の前年にナショナル・ギャラリーで百三十二点の作品を集めた大回顧展を開催した。

ポール・シニヤック (1863-1935) …省略

ジョヴァンニ・バッティスタ・ティエポロ (1696-1770) …省略

ジョセフ・マロード・ウィリアム・ターナー (1775-1851) …省略
ジェイムズ・マクニール・ホイットスラー (1834-1903) …省略

ヘンリー・ウッズ (1846-1921)

イングランド中西部のウォリントン生まれ。国立美術訓練学校の奨学金を得てロンドンに移住。挿絵で活躍し、ヴェネツィアを訪れて魅了され定住する。後にアカデミーの会員となる。

【関連年表】から

紀元前1世紀 古代ローマ帝国が、現在のヴェネト、フリウリ、トレンティーノ、イストリア地方を含めた地域を「ヴェネチア (Venetia)」と呼ぶ。

5世紀 ゲルマン民族大移動により異民族に追われた北イタリアの住民ウェネチイ人がラグーナ (潟) に避難。

6世紀後半 ランゴバルド人の侵入により恒久的にラグーナに移住する。

六九七 ヴェネツィア共和国の初代ドージェ (元首) 選出、以後一〇〇年間で一二〇人のドージェを輩出

一一〇四 国営造船所を造る。この頃、地中海で最も力を持った海洋

国家となる。

一二〇四 ヴェネツィアの率いる第四次十字軍がビザンティン帝国の首都コンスタンティノープルを占領

一二九一 ガラス職人のムラーノ島への強制移住の法令発布。

一四二〇年代 フィレンツェでブルネレスキが遠近法を考案。

一四六九 活版印刷術が伝わる。以後16世紀前半まで、ヨーロッパ最大の印刷・出版業の中心地となる。

一四七五 アントネッロ・ダ・メッシーナ (1430-79) がフランドル風の油彩画技法をヴェネツィアにもたらす。

一五〇〇 バルバリの木版画「ヴェネツィア鳥観図」刊行。

ダ・ヴィンチがヴェネツィアに短期滞在。

一五二七 カール5世の神聖ローマ帝国軍によるローマ劫掠。多くの芸術家や知識人がヴェネツィアへ逃れてくる。

一五七一 ヴェネツィア海軍、スペイン、ローマ教皇庁の連合軍レパントの海戦でオスマン帝国の艦隊に勝利。

一五七四 元首公邸の火災により、ティツィアーノの絵画も焼失。ヴェロネーゼが再修飾を開始。

一五七八 ヴェネツィアでペストが大流行。ペスト感染によりティツィアーノ没。

一五七七 元首公邸の二度目の火災により、ベッリーニ、ヴェロネーゼ、ティントレット、ティツィアーノらの作品が焼失。

一六〇四 ケプラーが著作の中で「カメラ・オブスキュラ」という語を初めて使う。

一六三〇 ヴェネツィアで再びペストが大流行し、人口の三分の一が犠牲となる。

一六四五 オスマン帝国とのカンディア戦争(第五次オスマン戦争)で、ヴェネツィアはクレタ島を失う。

一六七四 ヴァンヴィテッリがオランダからローマに移住し、ローマのヴェドゥータを描きだす。

一六八一 美術用語として景観画というジャンルが定義される。

一六九四 ヴァンヴィテッリがヴェネツィアに滞在(〜1965)し、後にそのヴェドゥータをローマのアトリエで制作。

一六九七 カナレット生まれる。

一六九八 ティエポロ生まれる。

一七〇〇 この頃、ルカ・カルレヴァリス (1663-1730) がヴェネツィアでヴェドゥータを描き始める。

一七一二 グアルデイ生まれる。

一七二二 ベロツト生まれる。

一七四三 マリエスキ、ヴェネツィアで没。

一七五六 ティエポロ、アカデミーの初代会長となる。

一七六八 カナレット、ヴェネツィアで没。

一七七〇 ティエポロ、マドリッドで没。

- 一七八〇 ベロツト、ワルシャワで没。
- 一七九三 グアルデイ、ヴェネツィアで没。
- 一七九七 ナポレオンのフランス軍侵攻により、ヴェネツィア共和
国滅亡。

- 一八一六 ゲーテ『イタリア紀行』が刊行される。
- 一八一九 ターナーが初めてのイタリア旅行でヴェネツィア訪問。
- 一八二二 エテイ、ヴェネツィア訪問。翌年まで滞在。
- 一八二六 ボニントン、ヴェネツィア訪問。
- 一八三四 ミュラー、ヴェネツィア訪問。
- 一八三六 ラスキン、初めてのヴェネツィア訪問。
- 一八五一 ターナー、ロンドンで没。
- 一八七六 ウッズ、ヴェネツィア訪問。
- 一八七九 ホイツスラー、ヴェネツィア訪問、翌年二月まで滞在。
- 一八九二 ブータン、最初のヴェネツィア滞在。
- 一九〇四 シニャック、ヴェネツィア滞在。
- 一九〇八 モネ、ヴェネツィア訪問、約二か月滞在。
- 一九一四 第一次世界大戦勃発

憧れのカナレットの油彩を始め、ベロツト、グアルデイの作品も見れ
た！ という思いである。そして、ティエポロにはさすがに圧倒され
た。

次に「モネ 睡蓮のとき」展開催の国立西洋美術館を訪れる。土曜日
は夜八時まで開館と思っていたが、この日は整理のため休館だった。誠
に残念。モネより常設展の中の風景画を期待していたのだった。ホイエ
ン、弟オスターデ、ヴェルネ、ベルタン、そしてイギリスの風景画家ウ
イルソンとフィールディングを。仕方なくそのまま上野公園で、一日を
あるいは作品を思い出しながら、のんびり軽い夕食と珈琲を楽しみ。

そして、ヴェネツィアの若き美しい女子学生を思い出すのだった。月
初めに急遽、街にある「太宰治まなびの家」の代理管理人（解説員）を
していた時、訪問客の中に、太宰の母校である近くの弘前大学の女子留
学生二人が訪れ、小生の津軽弁風な日本語でも少し対話でき嬉しかっ
た。イタリアからということになるほどと、その美に納得し、さらにヴ
ェネツィアからと聞いて、ヴェネツィアのアプロディテ（ウエヌス）か
と思った。アプロディテの生地はキプロス島である。憧れのヴェネツィ
ア、憧れのジョルジョーネらヴェネツィア派、ヴェネツィア楽派とヴィ
ヴァルデイと告げると、学校の先生ですかといわれ嬉しき。カナレット
の名は抑えた。詩人が出て来なかった。

本文中の「注」「18世紀のヴェネツィア音楽」について、レグレンツィとアルビノーニ、ガルツピについて自らの忘備を含め主にウィキペディアなどネットから抄。

レグレンツィ (ジョヴァンニ 1626-90)

イタリア・バロック音楽の作曲家・オルガニスト。17世紀のヴェネツィアで最も高名な作曲家のひとりで、ヴェネツィアなど北イタリアの後期バロックの音楽言語の発展に極めて影響力があった。

ベルガモ近郊のクルゾーネに生まれ、おそらく地元で初期教育を受けた。一六四五年から五八年まで、ベルガモのサンタ・マリア・マッジョーレ教会のオルガニストに就任。一六五六年から六五年まで、フェラーラのアッカデミア・デットロ・スピリット・サント教会楽長に就任。一六六五年から八一年までの活動は資料に乏しいが、この間おそらくヴェネツィア救貧院で教鞭を執った。ウィーンやミラノ、パルマ、ボローニャ、ヴェネツィアなどでの就職活動に失敗するが、モデナやベルガモからの就任要請は丁重に断っている。一六八一年にヴェネツィアの聖マルコ大寺院の副楽長に就任し、八五年に楽長に昇進した。そこでの子弟に、トマゾ・アルビノーニ、アントニオ・ロットエイラがいる。またアントニオ・ヴィヴァルディの父ジョヴァンニ・バッティスタ・ヴィヴァルディが同寺院所属のヴァイオリニストだったことから、ヴィヴァルディの幼少時に音楽教育を施したとも推測されている。

レグレンツィは17世紀後半の北イタリアで流行したあらゆる楽種に手を染め、オペラや宗教曲、多種多様な器楽曲を遺したという。

アルビノーニ (1671 ヴェネツィア - 1751 ヴェネツィア)

ヴェネツィア共和国のバロック音楽の作曲家、ヴァイオリニスト。生前はオペラ作曲家として著名であったが、今日はおっぱら器楽曲、特にオーボエ協奏曲の作曲家として知られており、そのうちいくつかは頻繁に録音されている。なお、レモ・ジャゾットが『アルビノーニのアダージョ』として一九五八年に出版した曲は、ジャゾット創作の偽作であり、アルビノーニの楽曲との関連はないという。

ガルツピ (1706 - 1785)

ヴェネツィアの作曲家で、とりわけオペラ・ブッフアの作曲家として著名である。ヴェネツィアのラグーンにあるブラーノ島に生まれたため、「イル・ブラネツロ」というあだ名がついた。

一七四〇年に救貧院の音楽監督に任命され、四八年からは聖マルコ大寺院の楽団員として働き、六二年には同寺院の楽長に就任した。生涯のほとんどをヴェネツィアで過ごしたが、一七四一年から四三年までロンドンで、六五年から六八年までサンクトペテルブルクのエカチェリーナ大帝の宮廷にも勤めた。

ロシア時代にドミトリー・ボルトニャンスキーらの門人を育てた。

オペラ作品以外では、たくさんのチェンバロ曲と、いくつかのオラトリオが目立っている。

モーツァルト親子が来た頃

モーツァルト父子がヴェネツィアを訪れたのは一七七一年二月だった。当時のヴェネツィアは、ナポリと並んでまだイタリヤ・オペラの中で心地であり音楽が盛んだったといわれる。また、18世紀前半は同地生まれのヴィヴァルディ、アルビノーニ、マルチェロたちが活躍した輝かしい時代であったが、当時もまだ音楽教師として働いていたヴィヴァルディを始め、ガルツピ、ヨハン・アドルフ・ハッセなど錚々たる顔ぶれが指導に当たっていた。

瀬川紀雄HP 「シエカの風」展覧会に